
 ■ Article

「出会い」喪失の時代と子ども・若者の変容*

—現代社会と対人関係能力(1)—

石田裕久

(南山大学人文学部心理人間学科)

1. 問題の所在

本稿で『「出会い」喪失』として引き合いに出した「出会い」ということばは、人と人とが直接対面することによって行われる相互交流、すなわち、相手の顔色がわかり、声音を聞き取ることのできる、いわゆる face-to-face 状況での対人的なやりとりを意味している。過去数十年間にわたる科学技術の進展や情報化、あるいは社会情勢の移り変わりを俯瞰してみると、これらの変化は、人と人とが直接的に「出会う」機会を著しく減少させる方向で作用してきたといえる。言いかえるならば、私たちの社会は人が直接出会い、相対しなくても「用が足りる」という利便性をより増す方向で変化してきた。そして、このことは対人間のコミュニケーションの様相を一変させただけでなく、私たち、とりわけそうした社会の中で育った若い人たちの認知や態度にもきわめて大きな影響を与えているのではないかと考えられる。ここではそうした社会の変化と私たちの生活、とくに対人関係行動との関わりについて考察するとともに、これからの対人的コミュニケーションのあり方についての示唆を得ようとする。

ところで、「出会い」といえば、インターネット用語に出会い系サイトと呼ばれるものがある。ウェブサイトを利用して、匿名性を前提とした見知らぬ者同士が目的に応じた関係や集まりを作り出す仮想空間である。しかし、ここにあるのはことば本来の意味での「出会い」ではない。出会い系サイトにアクセスする目的はさまざまであろうけれども、これはむしろ「“出会えない”人々が“出会わずして”その目的を遂げようとするシステム」であるといえるかも知れない。

* 本研究は2006年度パツへ研究奨励金 I-A-2(一般)による成果の一部である。

そもそも「出会い」というのは、ある機縁によって初めて顔を合わせた者同士が、「初めまして。〇〇と申します」と自己紹介し合うことから始めて、相互のやりとりを通して、より深く理解し合い、あるいは誤解し、もし何か共有できる関係が築かれたとしたら、その場合に共通の目標のために活動や時間を共にすることになるという、そうした実体あるプロセスの端緒を示している。そして、そこまでの過程をすっかり捨象してしまったのが、“出会い系”だといえる。

この“出会い系”という表現は、ちょうど“手打ち風”とか“木目調”とか称する場合の「風」や「調」と同様に、本物と外見は近似していながらも、実は似て非なるものであるということをよく表している。さらに言えば、これらは本物に到底及ばないことを承知の上で、見た目だけを似せようとするある種の切なさ、あるいはいかがわしさをも共に有している。現代は、このような意味での本来の「出会い」、すなわち人と人とが直接対面しての人間関係形成の機縁が失われつつある時代であるといつてよい。

筆者は先に、科学技術の進歩や情報化の進展にともなう社会の変化によって、私たちのコミュニケーションのあり方が影響を受け、かつては日常生活の中で養われていた対人関係能力や社会的スキルの形成が困難になっている可能性を指摘した（石田, 2005）。本論では、前述した「出会い」の喪失が、私たちの対人関係や社会生活にどのような影響を与えているのかについて考察するために、まず、子どもや若者の変容に関する論議を概観していく。

2. 現代社会と子ども・若者論

1980年代から90年代にかけて、学校を中心として子ども・青少年をめぐる社会問題、あるいはコミュニケーション不全や社会的スキルの欠如に由来する対人関係上の困難が数多く報告されるようになった。曰く、「学習する構えや意欲が大きく低下し、学ぼうとしない」「自分勝手な行動が多く、集団生活に適応できない」「人と違うところを良さと勘違いしている」「注意されると、自分だけが怒られると被害妄想を抱く」「忍耐力がなく、我慢ができない」「『ムカッ』『ウザい』『ぶっ殺す』などと平気で口にする」「人の感情や気持ちを分かろうとしない」などである。

当初、こうした子どもたちが引き起こすさまざまな問題行動に対しては、戦後日本の社会の変化に学校のシステムが対応できていない、あるいは教師の指導力が低下したためであるといった学校教育に原因を求める言説や、家庭におけるしつけ・教育力が衰退したことによるとする主張が喧しかった。とりわけ、女子高生コンクリート詰め殺人事件（1989年）、神戸連続児童殺傷事件（別名酒鬼薔薇事件、1997年）、佐賀西鉄バスジャック事件（2000年）、佐世保小6女児同級生殺害事件（2004年）などの少年によって引き起こされた凶悪事件の発生を機に、メディアの追求の矛先はよりいっそう学校・教師や家庭のあり方へ

と向かうことが多くなった。

その際の論調は、多くの場合、「学校・教師は子どもの要求に耳を傾けることなく旧態依然とした指導体制を続けており、家庭における父親の不在や教育力の低下が青少年の凶悪犯罪の増加、あるいは青少年による犯罪の凶悪化を招いている」という、ステレオタイプ化されたイメージを下敷きにしたものであった。こうしたイメージが幅広く人々に共有された背景には、凶悪な事件を起こしたとされる少年たちがしばしば、安定した、経済的にもむしろ恵まれた家庭で育った「普通の子」であり、殺人という重大な罪を犯すほどの動機や利害を持っているようにも見えないこと、また単なる殺人に留まらず遺体の損壊をもともなっていたことなど、これまでの常識を覆す（したがって、われわれの想像を超えた）犯罪であったことがあるのではないだろうか。

広田（2001）は、こうした「家庭の教育力の低下」や「しつけの衰退」と現代社会の青少年犯罪を安易に結びつけたり、特異な犯罪事例を取り上げて、今の子どもは以前とは大きく変わってきたと短絡的に結論づける言説に注意を喚起する。

メディアが作り出した「今どきの子供」という物語の中で、世間も、研究者も、そして子供自身も世界を解釈している部分があるのではないだろうか。そもそも、果たして子供は本当に変わったのか？ それらの子供・青年論が描く「変化」が実際の子供とは乖離した「物語」である可能性はないのだろうか。あるいは、子供の姿や変化の記述の中には、こっそりとある道徳的・政治的判断が忍び込んではいないだろうか。研究者は子供研究にあたって、それを自覚し、世間に流布するイメージに足をすくわれないようにする必要がある。（343頁）

確かに、戦後からの少年犯罪の統計を子細にたどってみると、必ずしも近年になって青少年の凶悪犯罪が増加しているわけではなく、犯罪統計にみる「殺人」で検挙者に占める青少年の割合はむしろ減少傾向を示しているし、実数としても減っている。つまり、最近の若者は「ちょっとしたことでカッとになって殺人を犯す」わけではないのである。「父親の不在」や「核家族化」が「家庭の教育力の低下」をもたらし、青少年の凶悪犯罪を増加させているという物語は、「昔はこんなことはなかった」と good old days を懐かしむ心性に受け入れられやすい筋書きではあるだろう。広田（1999）によれば、「家庭の教育力が低下している」というイメージが、青少年の凶悪犯罪が起こるたびに人々に抱かれるのは、しつけに無関心な親が増加したからでも、家庭が学校にしつけを依存するようになってきたからでもない。反対に、高度成長期に進行した富裕化は、若い親たちに子供の教育によりいっそうの関心を払うだけの時間的・経済的余裕を生み出し、「子供をよりよく育てよう」とする関心や熱意はむしろ

強くなっている、という。つまり、親が子どもの教育に全面的に関わる時代になってきたのである。そして、高度経済成長期以降、社会階層の差が不明確な時代に入ったこと、また、「もともと非行少年を生みやすい下層」と「家庭でのしつけを誤ると非行に走ってしまう豊かな階層」というかつての階層別の説明構図が崩れたことから、「階層」そのものが見えにくくなり、「どの子ども同じ程度、非行に走る危険性を持っている」と意識されるようになっていった。こうして、「家庭のしつけの失敗が非行を生む」という物語が、いまやあらゆる階層のあらゆる種類の非行に対して適用される、オールマイティな図式が生まれたのではないかと考えられている。

以上で見てきたように、「しつけや教育力が低下しているわけではなく、ましてやそれが青少年の凶悪犯罪を増加させているわけではない」ことはその通りかもしれない。だが、社会全体として見た教育に問題はないし、大方の青少年はうまく育てており、最近の子どもは変わったとする子ども・青年論は、すべて作られた「物語」だと結論づけていいのだろうか。対人関係上の困難や社会的スキルの低下といった子どもの問題行動が増えているとする主張は、わが子の教育に対するプレッシャーや不安から生み出された過剰な反応であり、とりわけ深刻な問題はないといって差し支えないのだろうか。

広田自身も指摘しているように、彼が取り上げて議論しているのはしつけ・教育という子どもに対する意図的な働きかけであるが、子どもたちは意図的なしつけ・教育によってのみ影響を受けるわけではない。時代や社会のあり方によって規定される周囲の生活環境が、子どもたちの成長・発達にどのように関わっているのかについても、慎重に検討してみる必要がある。ただ、社会環境と子どもの成長・発達の関係について論じようとする場合、2つの大きな困難がある。

まず第1にあげられるのは、社会環境は多義的であるから、それがどのように影響しているのかを特定することはきわめて難しい、ということである。たとえば、明日の食糧を確保することさえ困難であるような貧困の支配する社会では、「摂食障害」というような病理は生まれ得ない。しかし、他方で栄養失調が原因で陥る病は少なくないだろう。このように、「社会」は病理を生むだけでなく、それまであった問題を減少させる可能性もある。したがって、そのメカニズムを筋道立てて説明することは至難であるが、次のように考えることはできるだろう。つまり、周囲の環境が私たちに与える影響がポジティブなものなのかネガティブなものかは決められないが、人間が変わっていく機会を準備したり、きっかけを提供することは確かだと思われる。

この点について、最近増えたといわれている「キレる子ども」のケースを考えてみよう。「キレる」というのは、「我慢ができない」「欲求不満に耐えることが難しい」「欠乏に対するセルフコントロールが機能しない」ことを意味する。社会が豊かになるというのは、すなわち望んでいるモノが容易に手に入る

ということであるから、欠乏感を抱く機会そのものが少なくなることを含意している。空腹はすぐに癒され、享樂はただちに味わうことが可能となる。近年、急激に発展してきたビジネス・モデルであるコンビニエンス・ストアや消費者金融が提供しているのは、人々の「我慢は不要」を支えるサービスである。このように「豊かさ」とは、ある面で「我慢しなければならない状況が少ない」ということだから、豊かな社会では欲求不満耐性が低くなる可能性がきわめて大きくなるといっていいただろう。したがって、こうした観点から社会の変化を考えていくことが求められる。

第2に、社会の変化が人々の行動や態度を変容させたことを実証的に示すことが難しい、という点があげられる。犯罪や事件のように各種統計資料に現れていれば確認のしようもあるが、「キレやすい子ども」が過去数十年の間にどのように推移したか、についてはデータを示すことはできないだろう。したがって、この点については横断的な調査結果のあるものを別にすれば、日常そうした子どもに接して定点観測をしている、教師や医師などの観測者の報告に頼らざるを得ない。もちろん、この場合、20年前に子どもを観た目と現在子どもを観る目では、観測者自身の視点そのものが変化している可能性も否定できない。観測者も古き良き時代を懐かしむノスタルジーを多かれ少なかれ持っているからである。このような点に留意しつつ、子どもの変容を辿っていかなければならない。

「KY（空気が読めない）」とか『バカの壁』（養老, 2003）が流行語になったり、大ベストセラーになったりするのは、それらに同感する人々が多いからであろう。私たちが日常生活の中で実感として感じる子どもや若者の問題行動、街角や通勤電車のなかで実際に目にする非社会的な行動は、学校や家庭の指導力・教育力の低下によってもたらされたのではなく、「子ども・若者たち自体の変容」のためであるとする主張が、90年代以降、数多く現れ始めている。すなわち、社会の変化が子どもたちの生活スタイルや価値観、精神生活に地殻変動ともいえる構造的な変容をもたらし、学びからの逃走、働くことの拒否、自己の世界への引きこもりをもたらしているのではないか、というのである。

3. 子ども・若者の変容

最近、ある新聞の地方版に、警察署が自転車に2人乗りをしていた15歳の女子高生を摘発したという、次のような記事が掲載された。記事の伝えるところによると、市内の女子高生が路上で自転車の後部荷台に同級生を乗せて2人乗りをしていたところを警察官に発見され、3回立て続けに警告を受けたにもかかわらず2人ともそれを無視して運転していたことから、摘発される事態となった。取り調べに対して2人は「降りるのが面倒くさかった」と供述したとのことである。

通常は、自転車の2人乗りくらいでは、警官から注意されることはあっても

摘発まで受けることはほとんどない。しかし、「降りるのが面倒」なために摘発されてしまったとしたら、その後、自転車を「降りることよりもはるかに面倒」な警察の取り調べや親からの叱責、学校での処分を受けなければならなくなることを、彼女たちは想像できなかったのだろうか。女生徒たちにとって、こうした一瞬の「面倒くささ」の代償として、はるかに「高くつく」制裁を覚悟しなければならないというのは、まことにもって「間尺に合わない」出来事のはずである。その瞬間に感じる面倒くさを優先することが、すぐ後にどのような事態を引き起こすのかについて考えが及ぶことがなぜなかったのか。現在の状況を時間的展望のなかで理解・把握すること、これは「文脈を読むこと」と言いかえてもいいが、彼女たちにはこの能力が決定的に欠けていたといえる。

内田（2006）は、ムカムカするので誰かを刺せばスッキリすると考えマンションの階段で小学生の女の子を刺した予備校生や、教え方に文句をつけられたのでムカついて塾の教え子を刺し殺した大学生なども、そもそもこうした「間尺に合わない」とか「勘定が合わない」という概念そのものを欠いているのではないか、と指摘する。

彼らにとっては、当面する「不快」の除去が最優先のことであり、その「不快」がどのような経緯で彼を苛むことになったのか、その「不快」を暴力的に除去した場合、どのような別の「不快」が彼を苛むことになるのかを考える気はない。彼らはおのれの「むかつき」がどのような文脈に位置づけられるかを知るためには一片の知的資源も投じなかったのである。（26頁）

内田も述べるように、このような「文脈が読めない」という症状は、コミュニケーション不全の典型的な徴候である。そもそもコミュニケーションは、時間的な流れのなかでその文脈を踏まえたやり取りをすることで成り立つものである。「今日はどうして来たの？」という発問が、交通手段を聞いたものなのか、来ることになった理由を尋ねたものなのかは、その前の話の流れを考慮に入れて、初めて理解されるものだからである。

筆者たちはかつて、高校生を対象として学校中退に関連した意識調査を行ったことがある。高校生活に関する幅広い質問項目について尋ねた結果、中退率の高さと強くかかわっていたのは「社会化への不安の低さ、根拠のない楽天主義」といえるものであった。具体的には、「目立ちたい」「今の社会は生活しやすいと思う」「何をしてでも生きていけるという自信はある」「自分には他の人と違った才能があると思う」などであった（村上他, 2002）。この研究から、将来への見通しをもって今何をすべきかについて考えるのではなく、「なんとかなる」と意識が高校中退という行動と関連していることが示唆された。

現代社会、とりわけ若い人々の間に、時間的展望の上になんてものごとを理解したり、文脈や空気を読むという能力が失われてきているのはなぜなのか。

こうした子どもや若者の変容が、はっきりと指摘されるようになったのは1990年代に入った頃からである。

河上亮一や諏訪哲二を中心とする「プロ教師の会」は、『ザ・中学教師子どもが変だ!』（別冊宝島編集部, 1991）のなかで、80年代初頭から生徒がさま変わりしてきたことを、学校現場における数多くの事例を示しつつ指摘した。そして彼らによると、子どもの変容は大まかに2つにまとめることができるという。一つは、個人の欲求が全面に出てきて、それを満たすことが最優先され始めたことである。その結果、生徒一人ひとりが自分の欲求や要求をストレートに主張し始め、教師がそれを抑えようとしても、一步も引かない生徒がどんどん増えてきた、とされる。もう一つは、自分の発言や行動が他人にどんな影響を与えるかをほとんど気にしないために、他の人と一緒に何か活動したり、作業したりすることがとても難しくなり、その結果、他人との関係が希薄化していることである。

諏訪（2005）は、このような自己をほかの自己（他人）と比べて客観化することが難しく、自己（の感覚）に閉じこもりだした子どもたちの傾向を「オレ様化」と呼んでいる。彼は80年代に入って、次のような生徒に頻繁に出会うようになって衝撃を受けたという。

トイレで喫煙していた生徒が教師に見つかり、生徒指導部長であった私のところへ連れてこられた。1983（昭和58）年のことである。3年生のごくふつうの感じの生徒だった。その生徒は喫煙を現認した当のその教師の前で「タバコは吸っていない」と言いはるのである。その教師はびっくりして口がきけない。生徒は昔かたぎの不良ではないし、わざと反抗的にふるまっているわけでもなさそうだ。「認める」より「認めない」ほうが自己の利益になると思ったのであろうか。この生徒はとうとう最後まで認めなかった。こういうことは私の生徒指導歴のなかでもはじめてのことである。（46頁）

私に一番衝撃的であったのは、1985（昭和60）年の4月に学年主任である私の学年の、それも私のクラスの入学したばかりの15歳の男子生徒に「しゃべってねえよ、オカマ」と言われたことである。その子は授業の初めからずっとしゃべっていた。長話が、小さい声ではあるがずっと続いていた。教師とてすぐには注意しないものである。その子に注意をうながすような目つきや動作をしたり、しゃべるのを止めてじっと見て自省を求めたりするのが最初の動きなのである。それでもしゃべるのを止めない。がまんできなくなつてつい注意したのである。こちらも時々キレることがあるが、そのときは怒鳴ったわけではない。ところが注意したとたんに「しゃべってねえよ、オカマ。ふざけんじゃねえよ」と反撃された。（50頁）

ここで述べられたような子どもたちの出現は、わが国に限ったことではない。ゴールマン, D (2007) は、人と人との結びつきが危機を深めているとして、次のようなケースを紹介している。

テキサス州のある幼稚園で、先生が六歳の女兒に「おもちゃを片づけましょう」と言ったところ、女兒はものすごいかんしゃくを起こして大声でわめき、椅子をひっくり返し、先生の机の下にもぐりこんで、ひきだしが飛び出すほどの勢いで机を蹴った。幼稚園児がこのように「キレル」ケースは、ここだけの例外ではない。テキサス州フォートワースの一学区だけでも、こうした報告が何件も挙がっている。「キレル」現象は、貧困層の児童だけでなく裕福な家庭の児童にも見られる。(14頁)

最近の子どもたちが教師から叱られても素直に非を認めたり、謝ったりすることが少なくなったとの声はよく聞かれる。たとえば、休み時間に暴れていて不注意で窓ガラスを割って担任教師からお説教されても、本人からの謝罪の言葉がなかなか出てこない。彼らはしばしば「自分だけが悪いのではない。クラスの誰々が自分にちょっかいを出したから暴れたのだ、自分だけを責めるのは筋違いだ」と主張するのである。このような傾向は大学においても例外ではなく、筆者の見聞する範囲でも2000年頃から、講義中の私語を注意された学生による、「なんで自分たちだけ注意するのか、他にも喋ってるやつはいるじゃないか」と逆ギレしたコメントを「授業評価」の自由記述欄に見かけるようになってきた。また、大学が自己評価・点検の一環として設けた投書欄などにも、教師の「注意」に対して「やる気を喪失させる」「自分たちを否定する」「一方的に決めつける」問題発言であり「心底頭にきた」、として“告発”するような指摘が数多く現れ出している。彼らは、たとえテキストやノートも準備せず、着帽のまま、飲み物を机に出したままという授業態度であったとしても、叱責ではなく優しいことばでやる気を喚起してほしい、と訴える。遅刻をしてすでに授業が始まっている教室に、踵のかたいサンダルでコンクリートの床に大きな音を響かせて入ってくる、着席の際に椅子を音を立てて引く、ドアを静かに閉められない、というような学生の行動が目につきたしたのは、90年代半ばからであったような気がする。彼らは自分自身を対象化して見る、自分が置かれている状況に配慮した行動をとる、他者からどのように見られているのかを考慮に入れる、ということが苦手になっているのだろう。

裊岩 (2001) は、カウンセラーとして子どもたちのこころの問題について相談を受ける中で、1995年頃から教師たちによる「子どもたちの幼さ」に対する指摘、子どもとのコミュニケーションがうまく成り立たないという訴えが多くなった、と述べている。彼女によれば、子どもたちのコミュニケーションや対人関係がうまく運ばないのは、ことばの背後には必ず感情がともなっていると

いうことに気づいていないためではないか、という。相手の気持ちや自分の中に起こっている危険や不安といった感覚・感情をうまく感じ取ることができない子どもたちは、自分の感情を十分味わって、それを自分なりにコントロールする方法が身につけていないために、コミュニケーションや対人関係の不全を起こすことが多くなっていると推測する。相手の気持ちを知るためには、自分の感情を手がかりにする以外に方法はない。したがって、自分の気持ちが理解できなければ、相手の気持ちを知る術がないことになる。

速水・丹羽（2002）は、以前の子どもと比較して、現在の子どもの感情の持ち方や表出の仕方にどのような特徴があるのかについて、小・中学校の教師を対象に面接調査を行っている。「怒り」「悲しみ」「喜び」「恐れ」「驚き」「面白い」という6つの感情について教師に尋ねると、今の子どもは昔の子どもと比べて、「怒り」を頻繁に感じ、それ以外の感情については以前より感じにくくなっており、とりわけ「喜び」「驚き」を感じるものが少なくなっている、という。また、感情表出については、今の子どもは「怒り」を表すことがきわめて多くなっており、「面白い」の表出は以前も今も変わらないが、その他の4つの感情はいずれも顔の表情や身ぶり、態度、声色などに表れ出ることが少なくなっている、と教師は認知している。もちろん、子どもを観察している教師自身が教職経験を積む中で年々変化しているわけで、ここにはそのことに由来するバイアスが含まれる恐れがないわけではない。ただ、こうした結果は、今の子どもたちが自分や他者の感情をうまく感じとることができなくなっているとする、先の巖（2001）の指摘とも一致するものである。

ところで、速水（2006）は、近年の若者や子どもたちが怒りを多く生じやすい背景として、自分に降りかかった不幸や不都合な出来事の原因を他者に求める傾向、周囲の他者を「とるに足らない奴」であると軽視することによって自分の体面を保とうとする心性があるとして、これを仮想的有能感と呼んでいる。仮想的有能感は、自分自身の実績や能力を客観化することなく、他者否定・他者軽視によって自己肯定感を得ようとするもので、諏訪（2005）の主張する「オレ様化」という指摘ときわめて類似している。

子どもたちの変化をめぐるもう一つの話は、学習意欲の喪失とそれからもたらされたと考えられる学力低下の問題である。学力低下論争のきっかけは、日本数学学会によって行われた学力調査の結果から、「わが国の最難関大学の学生の2割が小学校の分数計算ができない」という事実が公表されたことであった（岡部他、1999）。すでにこの当時、多方面で子どもたちの学力低下への危惧が広がっており、広く一般の関心を引き起こすこととなった。こうした学力論争は、2004年頃から俄然注目を浴び始めた、働こうとも学ぼうともしないニート（Not in Education, Employment, Training）と呼ばれる若者たちの出現・増加によって、さらに耳目を集めることになる。

佐藤（2000）によると、彼が「学びからの逃走」という現象に気づいたのは、

1990年代の初めの頃だという。この頃、総務庁やIEA（国際教育到達度評価学会）が行った国際比較調査の報告から、日本の子どもたちの家庭での学習時間が諸外国と比べてきわめて低いレベルに落ち込んでいることがわかった。そして、95年以降に実施された種々の調査結果を総括すると、「学びからの逃走」は、小学校高学年から始まって、中学校になると7割以上の子どもに勉強嫌いが広がっているという。

また、荻谷（2001）も、学習指導要領に代表される教育政策との関連で、比較的早くから学習意欲や学力低下の問題を指摘してきた一人である。ただ、彼の場合には、学力や学習意欲の低下があまねく生じているというよりも、社会階層の下位のグループでより顕著に起こっている現象だと考えられている。荻谷は、両親の学歴や父親の職業などから分けられた社会階層の階層間格差拡大という、日本社会の構造的な変化がこうした教育問題と密接に関わっているという。つまり、少子化による受験競争の終焉や学歴により保証されてきた終身雇用の崩壊によって、学習への動機づけが機能しなくなりつつある中でも、社会階層の比較的上位の家庭で育った子どもたちは、たとえそうしたインセンティブが見えにくくなっても、彼らの環境ゆえに意欲を維持していく。こうしたことから、意欲のある者とない者、努力する者としらない者の間でさらに格差が広がっていくのではないかと警鐘を鳴らしている。

これまで見てきたように、子どもたちが変わってきたとする広範囲にわたる指摘が、1990年頃から数多く現れてきた。これらを整理すると、①自己中心性と社会的スキルの欠如、②刹那主義もしくは時間的展望のなさ、③学びからの逃避（学習意欲の低下）といった側面にまとめることができる。ところで、ここで指摘されたような子どもたちの変化を認めるとしたら、次に問われるのは、こうした諸側面はそれぞれが独立して、相互に関連なく、平行して生起しているのだろうかという疑問である。筆者にはこれらの変化が、自己や自分の立場を客観的に認識するとともに、周囲の状況や他者の立場を正しく認知し、それらを総合的に判断して自らの行動のあり方を決める、という社会的能力が育っていないことがその根底にあるためではないかと思われてならない。あるいは、これは彼らが社会化されておらず、未熟な状態にあると言いかえてもよい。これは一体何によってもたらされたのであろうか。

4. 子ども・若者の変容は何によってもたらされたか

諏訪（2005）は、自己を客観視することができず、自分だけの感覚に閉じこもりがちな傾向を「オレ様化」と呼んだ。そして、子どもや若者たちが「オレ様化」していった原因を、社会が「農業社会的」段階から「産業社会的」段階を経て、市場原理に支配された「消費社会的」レベルになってきたことに求めている。

かつての子どもたちは、家庭での養育としつけを受けて地域の子ども集団と

出会い、そこでの遊びのなかで、集団性やルールやリーダーシップを学ぶ（いわゆる、ギャング・エイジ）とともに、子どもの「自我」も相対化され、その後で学校に入ってきた。しかしながら、60年代以降の社会の産業社会化によるテレビの普及や空き地の消滅などによって、地域の共同体が崩れていくことになる。そして、それがさらに進んだ消費社会は「商取引をする主体は貨幣をもっていけばすでに一人前であり、一人ひとりの“一”の内実は問われることはない」という市場原理を行き渡らせることになった。

こうした社会の変化は、子どもたち自身の間としての成熟の度合いだとか、身につけた才能だとかに関係なく、お金さえあれば大人も子どもも誰もが同じように扱ってもらえることを彼らに学ばせるのである。「学びからの逃走、労働からの逃走」という現象がなぜ起きたのかについて論じた内田（2007）も、消費社会化による市場原理の浸透という諏訪の解釈に同意している。彼は、社会的能力がほとんどゼロである子どもたちが、潤沢なおこづかいを手にして消費主体として市場に登場したとき、彼らが最初に感じたのは法外な全能感だったはずだと推測する。そして、子どもでもお金さえあれば大人とまったく同じサービスを受けることができるという全能感を、人生のごく初期から刷り込まれることの重みは、想像以上に大きいのではないかと述べる。これは単なる拝金主義的傾向が子どもたちに刻印されてしまうということとは違って、消費主体として立ち現れる限り、買う主体の属性の如何は誰からも問われることがない、ということの意味している（内田, 2007）。

今の子どもたちが学びの場に立たされたときに、「学ぶことは何の役に立つのか？」とビジネスライクな質問を発するのは、自分の支払うエネルギーや忍耐の総体と学びによって得られるものが、「現時点で等価交換可能かどうか」を判断基準としているためである。したがって、学びが一定の時間教室にじっと座って先生の話聞きという労力＝支払いに見合う、という“即時決済”ができて初めて、学ぶ価値があるものとみなされる。しかしながら、労働でも学習でも、それらすべてが直ちに等価交換できるというようなものではない。今の段階では勤務評定に現れなくても将来のために汗を流したりだとか、母語の習得のように学び始める時にはそれがどんな意味や有用性を持つのかはわからないことのほうが多いのである。即時決済だけで与信決済がないならば、金融システムは成り立たない。それと同じように、労働や学習の帳尻はその場ですぐに合わせられる性質のものではないのである。

こうした社会の構造的変化が学習意欲と関連しているとする主張は、佐藤（2000）や荻谷（2001）の議論にも共通している。日本は、1872（明治5）年の学制発布以来、一世紀たらずの間に教育の近代化をなしとげてきた。身分や階級・階層の違いを超えて、すべての国民に教育の機会を保障し、競争の原理を下敷きとして上昇志向をおおることによって、国家の統合と同時に産業化が急速に進められてきたのである。その際、教育の近代化・大衆化と産業・経済

の構造変化がきわめて短期間に、しかも同時並行的に進んだところに日本の近代化の大きな特徴がある。

こうした教育の拡大と社会の発展がパラレルに進行していた時期、すなわち、多くの子どもたちが彼らの親よりも高い教育歴、ひいては社会的地位を獲得することができている間は、学校や教師への信頼感は維持され、高い学習意欲や学習への努力は維持される。佐藤は、そうした日本における産業化と教育の急速な近代化が停滞・終焉した1980年前後から、子どもや若者が未来への希望を喪失し、学ぶ意味を見失い、学びへの意欲を失ったとみる。

荻谷はこれとは少し異なり、とくに戦後の産業と教育の大衆化の過程において、社会の階層化が形成され、その後の自己選択・自己責任という市場原理にもとづく教育政策がそれを再生産して、意欲格差（インセンティブ・ディバイド）社会を生んだと考えている。彼の主だった関心は、学習意欲が全体として低下しているのと同時に、社会階層による格差の拡大が進んでいることに向いており、「豊かな社会」の出現や学歴により保証された「終身雇用制度」の崩壊によって、子どもたちを学習へと動機づけるしくみが働かなくなった、とする一般的な原因論には異を唱えている。

このように社会の階層化が進んでいるとの指摘は、将来に対する希望の喪失、絶望感に焦点をあてた、山田（2004）の『希望格差社会』という主張と軌を一にするものである。家族社会学の立場から日本社会を調査・研究してきた山田は、1990年を境として、家族をめぐる社会状況や若者の社会意識が大きく変わったと述べる。「パラサイト・シングル」（親に基本的生活を依存しながら、生活を楽しむ独身者）、離婚、できちゃった婚、「フリーター」（未婚若年のアルバイト雇用者）、引きこもり、不登校など、これまで社会の例外であったケースが、社会的に無視できないほどの量になってきたと同時に、現在、生活の「勝ち組」「負け組」への救いようのない組み分けが進行しているという。このように社会が不安定化した理由として、彼は「リスク社会の出現」と「二極化」をあげている。

「リスク社会」とは、社会のグローバル化にともない、規制緩和など市場淘汰、競争を原理とする構造改革によって生まれた「リスクをとることを強制される社会」、「選択を強制される社会」を示している。「リスク」社会では、自分のことについては自分で選択・決定し、それによって得られた結果に対する責任も自らが負わなければならない。

失業したり、フリーターになるのは、自分の能力の問題である。離婚したのは、離婚するような相手と結婚したからである。そして、保険会社が倒産して保険金がもらえないのは、危ない会社を選んだ個人の責任であるというように、保険というリスクヘッジに伴うリスクの責任までとらされるのである。（46頁）

このようにリスクが普遍化しリスク処理の責任が個人化すると、個人の努力や生まれつきの境遇などによって、リスクをうまくヘッジすることができる人とできない人の差が生まれ、あたかも「大貧民ゲーム」のように二極分化していく。つまり、リスク社会とは、これまで国や地域社会や親類縁者、家族など、リスクをヘッジする役割を果たしていたネットワークが機能しなくなった社会であるといえよう。

さて、これまで見てきたように、子どもや若者の多方面に及ぶ変容が、市場原理や競争原理に裏打ちされた社会の構造的変化によっているのではないかとする多くの論者の意見を紹介してきた。ただ、筆者は社会の階層化や二極化による格差の拡大はこうした変化によって説明されるかも知れないが、子どもや若者が総体として地殻変動のように変容してきた原因は、もう少し別のところにあるのではないかと考えている。そのヒントになるのが「社会関係資本」(Social Capital) の変化という現象である。

5. 社会関係資本の衰退と「出会い」の喪失

社会関係資本というのは、物的資本 (Physical Capital) や人的資本 (Human Capital) と並ぶ概念で、さまざまな社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性、信頼性の規範を指している。具体的には地域住民や市民的なつながりを表すが、社会関係資本には個人的な側面と集団的な側面がある。前者は個人が自らの利益になるような人間関係を形成することであり、後者はより公共的、社会的な対人的つながりを意味している。とくにこの後者の社会的関係は、「お互いさま」「支え合い」といった「結 (ゆい)」の精神によって、社会の効率性を高めることが期待できるものである。こうした社会関係資本に関する調査研究は、わが国ではまだその緒についたばかりであるが、たとえばボランティア活動の活発な地域は犯罪発生率や失業率が低い、などの傾向が示されている (内閣府国民生活局, 2004)。

ところで、アメリカの政治学者であるパットナム, R. D. (2006) は、膨大な統計資料にもとづいて、アメリカ社会の市民的なつながり = 社会関係資本が1970年代から衰退を続けていること、そしてそれが教会や労働組合、PTA、各種友愛組合、ボランティア組織、ボーイスカウトやガールスカウト、あるいはリーグボウリングへの参加といった日常的でインフォーマルな社交にも至っていることを明らかにしている。

この世紀 (20世紀: 引用者註) の前半3分の2までは、人々はそのコミュニティでの社会的・政治的生活において、ずっと積極的な役割を担っていた。教会や集会所で、ボウリング場やクラブの部屋の中で、そして委員会のテーブルやランプのテーブル、そしてディナーのテーブルを囲みながら、年を

追うごとに、慈善活動に気前よく寄付する額も増え、コミュニティ事業には積極的に参加するようになり、他人に対して、ずっと信頼できるように振舞っていた。不可解にも、そしてほぼ同時多発的に、こういったこと全てを、以前より行わなくなり始めたのだった。(221頁)

筆者にとってきわめて興味深いのは、これらの物理的コミュニティ、対面コミュニティが衰退していった時期は、電話やインターネットに代表される情報通信テクノロジーが浸透してきた時期でもあったことである。こうした情報機器は、以前のメンバーが直接出会わなければ用を足せなかった時代に比べれば、はるかに広範囲な対人関係を取り結ぶ契機になりうるものであった。それにもかかわらず、どうしてこのような社会関係資本の衰微が地域や人種や社会階層を問わず生じたのか。日本でもアメリカでもほぼ同じような時期に起こっているのは、携帯電話やインターネットなどによる対人間のコミュニケーションのあり方の変化である。筆者はこうした直接出会っての対面的コミュニケーションによる時代から、間接的、非同期のコミュニケーションへの変化が大きく関係しているのではないかと考えている。今後、こうしたコミュニケーション様式の変化がと対人関係のありようにどのような影響を与えているのかについて、詳細に検討していきたい。

引用文献

- 別冊宝島編集部 1991 ザ・中学教師「子どもが変だ！」 別冊宝島129号
JICC出版局
- ゴールマン, ダニエル (土屋京子訳) 2007 SQ生きかたの知能指数－ほんとうの「頭の良さ」とは何か－ 日本経済新聞出版社 (Goleman, Daniel 2006 Social Intelligence : The new science of human relationships Bantam Books)
- 速水敏彦 2006 他人を見下す若者たち 講談社現代新書
- 速水敏彦・丹羽智美 2002 子どもたちの感情はどのように変化したか－教師の目からみた特徴－ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 49, 197-206
- 広田照幸 1999 日本人のしつけは衰退したか－「教育する家族」のゆくえ－ 講談社現代新書
- 広田照幸 2001 教育言説の歴史社会学 名古屋大学出版会
- 巖谷奈々 2001 感じない子どもころを扱えない大人 集英社新書
- 石田裕久 2005 「対人関係トレーニング」瞥見 人間関係研究 第4号 南山大学人間関係研究センター pp.125-133
- 菊谷剛彦 2001 階層化日本と教育危機－不平等再生産から意欲格差社会へ－ 有信堂高文社

- 村上隆・杉江修治・石田裕久 2002 高校中退に関する生徒の意識－尺度の構成と基礎的分析－ 中等教育センター紀要, 2, 113-130
- 内閣府国民生活局 2004 ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環 を求めて 国立印刷局
- 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄 1999 分数ができない大学生－21世紀の日本が危ない－ 東洋経済新報社
- パットナム, ロバート D. (柴内康文訳) 2006 孤独なボウリング－米国コミュニティの崩壊と再生－ 柏書房 (Putnam,R.D. 2000 Bowling Alone : The collapse and revival of American community. Simon & Schuster)
- 佐藤学 2000 「学び」から逃走する子どもたち 岩波ブックレット524 岩波書店
- 諏訪哲二 2005 オレ様化する子どもたち 中公新書ラクレ (中央公論新社)
- 内田樹 2006 態度が悪くてすみません－内なる「他者」との出会い 角川書店
- 内田樹 2007 下流志向－学ばない子どもたち働かない若者たち－ 講談社
- 山田昌弘 2004 希望格差社会－「負け組」の絶望感が日本を引き裂く－ 筑摩書房
- 養老孟司 2003 バカの壁 新潮社